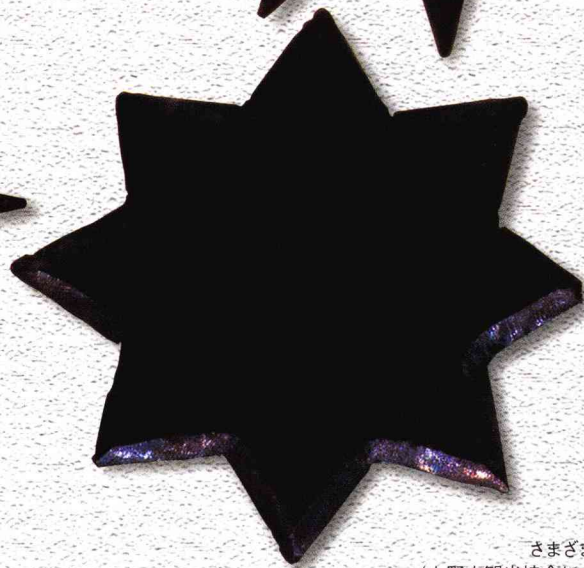
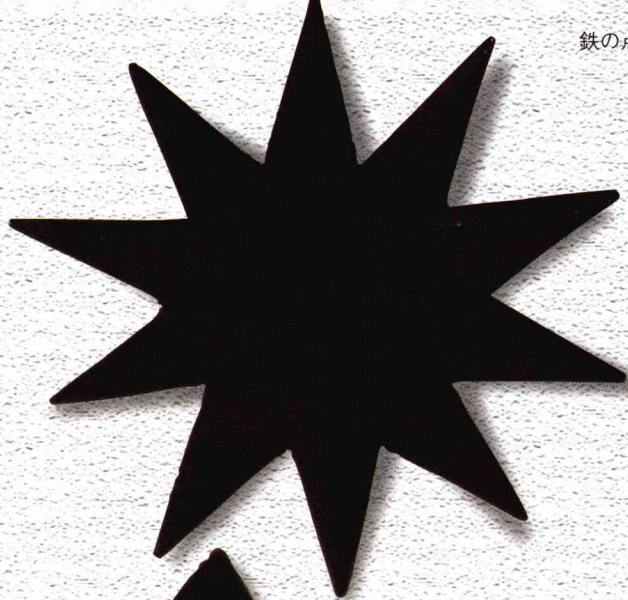
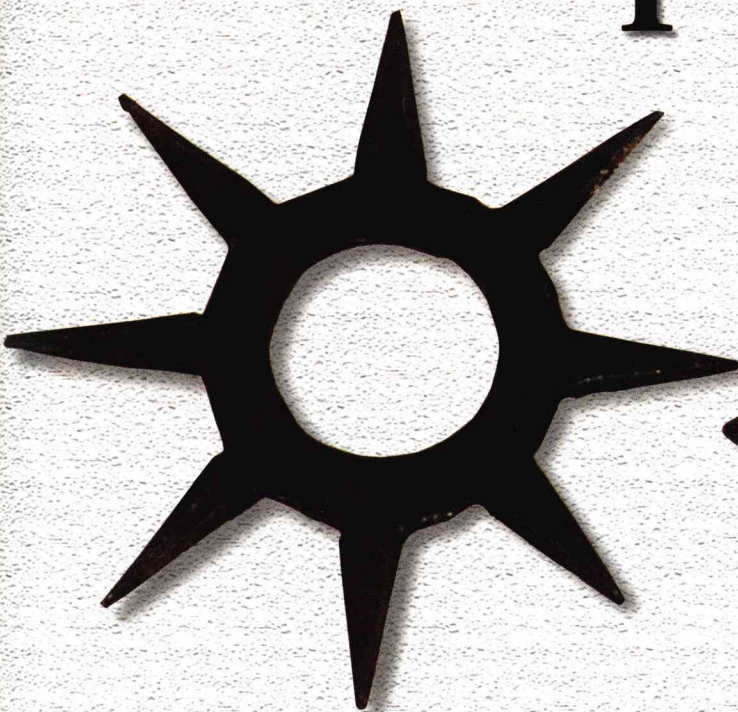


Steel Landscape

鉄の点景



さまざまな車手裏剣
(上野市観光協会による復元品)。

手裏剣

忍者の武器として御馴染みの手裏剣だが、その用法に関しては、忍者そのものの描かれかたと同様に、極端に誇張されて世に伝わっているというのが実態のようだ。忍者をとりまくさまざまな幻想の正体に、そのもっとも代表的な道具である手裏剣を手がかりとして迫ってみよう。

誇張されて描かれた手裏剣の使いかた

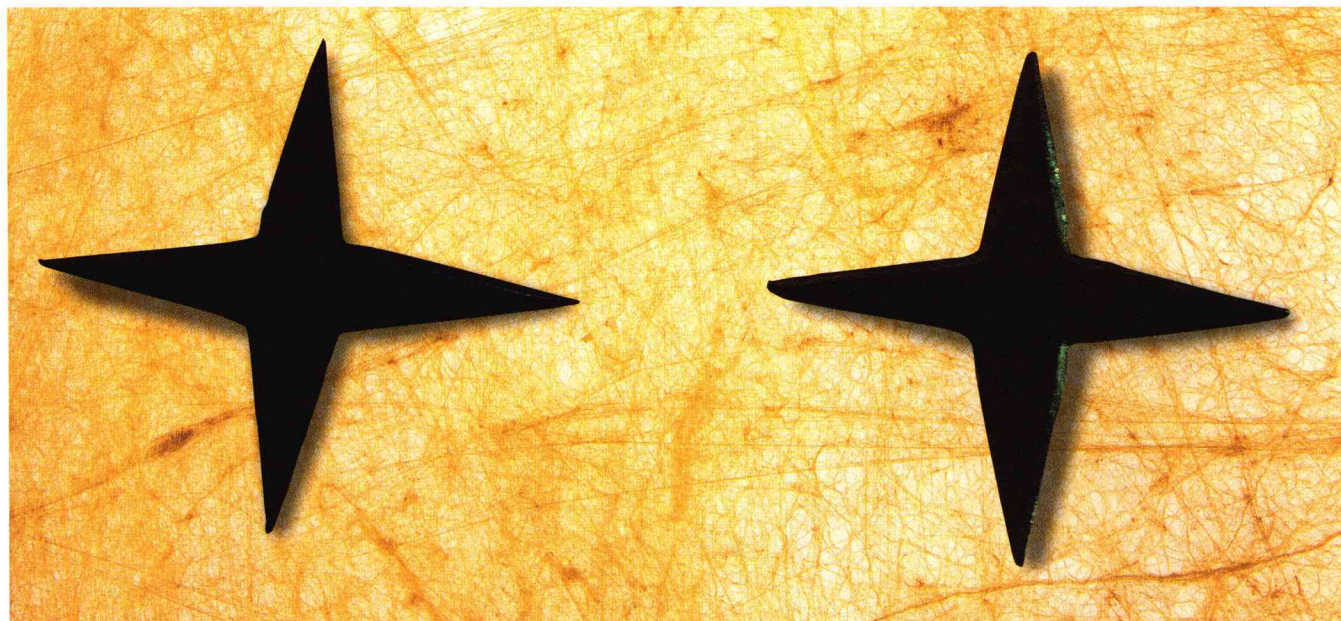
もの陰から忍者の投げた手裏剣が、シュッシュッと飛んでく……というイメージを、たいていの人が持っているであろう。これはつくられたイメージである可能性が高いという。ブーメランのような大きなものならともかく、手裏剣のような小型の飛び道具では、遠い間合いからでは空気抵抗によって速度が落ちてしまい、相手の攻撃力を殺ぐほどの打撃は与えにくいと考えられるのだそうだ。

手のひらに重ねた多数の手裏剣を、機関銃のごとく連射するというようなシーンも娯楽映画などでよく描かれる。薄く打ち伸ばしてあるとはいえ、鉄でできた幾十もの道具を身体どこに隠し持つのかということもさりながら、和鉄を鍛造し刃をつけた道具を、下忍(最前線に立つ身分の低い忍者)が何十枚も使い

捨てるように使うこともよく考えてみれば不自然なことである。

武術研究家によれば、現実の手裏剣は、むしろ刀を抜いた相手と向かい合う間合いから、虚を突いて眉間や目などをめがけて投げつけ殺傷するといった使い方をされたいという(長距離用の大型手裏剣も存在はしていた)。剣の使い手が持つ「長物」と対抗するための奇襲用武器と想像すればよいだろうか。素手の格闘が描かれる場合に、相手の虚を突くために出鼻に砂礫をかますというようなシーンがよく出てくるが、それに近い戦法といえるかもしれない。思わぬ角度から出る飛び道具というわけである。

一般に手裏剣というと、忍者の武器というイメージが強いが必ずしもそうではなく、武術の一部として、大名や将軍などかなりスポーツ的な感覚でたしなんでいたようである。手裏剣には、忍者のイメージに付随する車手裏剣(多針手裏剣)の



おなじみ十字手裏剣（上野市観光協会による復元品）。

ほかに棒手裏剣といわれるものも多用されており、今ふうを考えるならダーツ・ゲームに近いものとして楽しまれた可能性もあると想像できる。むろん武道として行われる限りは、相応の作法や格式はあったであろう。

忍者の持ち物としての車手裏剣ということでは、せいぜい数枚を紙などで包んで懷中に忍ばせるというような使い方であったのではないかと研究家には考えられているようだ。

大正時代につくられた忍者のイメージ

今日、映画やテレビで描かれる忍者のイメージというのは、大正時代の速記講談本である「立川文庫」のヒットによってころころ大きいといわれる。荒唐無稽といわれた講談の物語をそのまま文字に写して大衆向けの読み物として出版したもので、猿飛佐助や霧隠才蔵といったキャラクターが登場し、爆発的に売れたという。この時期の忍者ブームによって今日のわれわれが抱く忍者のイメージが築かれたと考えられるであろう。

忍者の起源そのものとはいささか複雑で、明確な絞り込みは難しいが、史料に出てくる最古の事例としては、聖徳太子が志能便と呼ばれる諜報者を使っていたという記録が残っているという。これが天武天皇になると、諜報活動のみではおさまらず、謀略やいわゆる破壊活動に用間（スパイ）を使っ

たらしい。こうした古来からの用間術に中国起源の兵法が修験道（いわゆる山伏）経由で体系化されてゆき、戦国の世を経て忍術として集大成されていったというのが、ごくおおよその流れである。

巻き物をくわえ煙とともに消えるなどという演出は、忍者がその必要上、薬物、毒物、火薬の知識に長じていたことや、

自己暗示や集中力増進のために用いた梵語の呪文の神秘的なムードが誇張されてできあがっていったものといえる。また他の武術と同様もしくはそれ以上に、忍術のルーツが修験道と深く関わっていたことも、その神秘性をいやましにしているのかもしれない。

ただ伊賀・甲賀の秘伝書として有名な「^{ばんせんしゅうかい}万川集海」には、現実には使えない奇抜な道具が多数記されているそうで、今日にたとえば「スパイ映画の新兵器」のような空想上のキワモノのツールが、虎の巻に堂々と紹介されていたことも事実のようである。

その代表ともいえるのが「^{みずぐも}水蜘蛛」、つまり足に履いて水上を歩行できるという道具である。もと上野市長（三重県）で忍者観光の基盤を築いた研究家の奥瀬平七郎氏らが、この道具を再現して試してみたところでは、どう工夫をしてみても、水上を歩行することはできなかったという。奥瀬氏の推理によれば、水蜘蛛は著者の藤林佐武次が自派の忍術を誇示するために中国の兵法書である「武備志」から孫引きして加えたのであろうという。兵法の本場、中国の書物の権威を信じてそのまま引き写してしまったわけだが、実はこの原典そのものがキワモノの寄せ集めであった。

滑稽にも思える逸話だが、今日のアカデミズムの世界でもまったくありえない話とはいき切れないであろう。「万川集海」が書かれたのは、戦乱の世が終り、忍術そのものが衰退期に入る時期であった。社会が安定し「現場」から乖離してゆくなかで安易な権威主義に陥っていったこうした過去の滑稽な過ちは、今日のわれわれにも、教訓を与えてくれるもののようにも思える。

〔写真協力：三重県上野市観光課〕